

シチェドリンとドストエフスキイとの論争素描

(1)

相馬守胤

はじめに

シチェドリンの作品を理解するうえで大きな障碍となる諸要素の一つとして、前稿¹⁾では「イソップの言葉」によるアレゴリーの一端に触れてみたが、これら諷刺的アレゴリーの多様さとその殻の堅固さは、まさに当時の検閲官を悩ませたほどであって、もとより拙稿の筆者は、作者が意図した真意の外周を歴廻る以上に出るものではない。ことに『同時代人』、『祖国雑記』等の編集責任者として広範な時事評論その他に健筆をふるいながら、大地主義陣営をはじめ、ナロードニキの一部とも論戦をくりひろげた当時の作品には、論敵の言説との関連を、その背後事情と併せて克明に考察しなければ看過しがちな、婉曲にしてその実かなり辛辣な表現が随所に潜在している。そこで今回は数多い論敵の一人、ある意味ではむしろ最強の論敵であり、ついにかみ合うことなく、またかみ合うはずもなかったドストエフスキイ(Ф. М. Достоевский, 1821-1881)の種々の発言に因む、シチェドリン(М. Е. Салтыков-Щедрин, 1826-1889)の作品中の論争的陰喩について、両者の論争の経過をかいつまんで素描しながら検討を加えてみたい。

最後まで一致点を見出すことなく、20年の長きにわたったこの文学的論争は、かみつぎ屋シチェドリン(ドストエフスキイの云う「吠えて咬付くスピッツ」²⁾)の執拗な吠え声に、大牛の如きドストエフスキイ(『イスクラ』の云う「仕様のない奴」³⁾)が、ついにはこれを振り払い切れずに、ほとんど辟易しながらも、お互い大人げないと思ったのか、まともにとり上げて論戦を交わす相手とみなすこともなく、揶揄の応酬に本音を織りまぜた観もある。

ドストエフスキイの文学が、時代と国境を越えて不滅の価値と深い魅力をたたえていることは言を俟たない。ゴーゴリの最も天分ある後継者、社会心理小説の卓越した巨匠、批判的リアリズムの擁護者として、シチェドリンはドストエフスキイを高く評価し、短篇《Кроткая》のような珠玉の作品は、あらゆるヨーロッパ文学の中でもその類例は数少いと讃辞を惜しまず、『罪と罰』、『白痴』における構想や心理描写の深さを賞讃するとともに、自分には描き得なかった人間像の創造を、一部の矛盾を指摘しながらも絶賛している。同時にその世界観と反動的傾向には常に激しく対決を続けた。当時の読書界、就中青年層に少なからぬ影響力を及ぼしていたドストエフスキイの「文学的」な語りかけが、同時代の「政治的」論敵にとっていかに大きな壁として立ちちはだかっていたかを、政治面、思想面の激動期における文学者のありかたの考察を通して素描を試みることは、両者の作品研究の側面を補わないでもないと考えられる。

この論争はドストエフスキイの突然の死によってやむを得ずその幕をとじるが、これを発端、第一段階、第二段階と大別して、1863-1864年の社会評論をめぐる『ヴレーミャ』、『エポーハ』と『同時代人』等の誌上論争を第一段階とし、比較的平坦な静穏期間を経て、1879年『カ

ラマゾフの兄弟』と『丸一年』で再び公然と対立した、文学作品による晩年の論争を第二段階として考察を進めてみる。

1 原因と発端

世界観、人生観、宗教観が根本的に相違する両作家の相剋は、一体いついかなる具体的な事実がその端緒となったかについては、これまでも種々の推論がなされているが、その推論の根拠となるべき諸資料の収集と分析の如何によって、現在まだ多少流動的段階にあると思われる。そこで拙稿においては主として現在続刊中のシチェドリン全集⁴⁾とドストエフスキ全集⁵⁾、及び筆者が知り得た限りでは豊富な資料にもとづいていると思われるボルシチェフスキの論文⁶⁾等にもとづきつつ考察してみたい。

1855年クリミア戦争が敗北に帰したところから、ネクラソフ（Н.А. Некрасов, 1821-1879）とチェルヌイシェフスキ（Н.Г. Чернышевский, 1828-1889）の『同時代人』のまわりには雑階級出身の進歩的知識人が結集し始め、「上から」の農奴解放か、「下から」の農民革命かの是非をめぐる、自由主義陣営と革命的民主主義陣営がその離間を深めつつあった。このような情勢を背景にドブロリュエボフ（Н.А. Добролюбов, 1836-1861）の論文《Черты характеристики русского простонародья》（1861年）に対するドストエフスキの反論《Г-н — бов и вопрос об искусстве》（1861年）が『ヴレーミャ』誌上に発表され、これらをめぐって西欧主義的革新陣営の雑誌『同時代人』と、西欧派とスラヴ派を折衷した大地主義的保守陣営の雑誌『ヴレーミャ』の対立が顕現化し、やがてシチェドリンとドストエフスキとの論戦は突如火ぶたを切ることになる。

シベリヤから帰ったドストエフスキは、農奴制国家体制に敵対する政治的信念の故に苦役に服した作家として、若い世代の熱烈な喝采で迎えられ、1861年には兄ミハイルと共同編集で『ヴレーミャ』を創刊し、『死の家の記録』を掲載したが、丁度これは農奴解放令が發布され、学生の騒擾、農民暴動が相次ぐ物情騒然たる年であった。

1862年、『ヴレーミャ』2月号のドストエフスキの論文『理論家たちの二陣営』⁷⁾においては、シチェドリンをナロードの魂の深みから発した、真理を愛する仮借なき筆力においてゴーゴリと比肩せしめ、4月号と9月号にはシチェドリンの『散文諷刺集』のうち2篇⁸⁾を掲載している。

しかし翌1863年の『再び「若き文筆家」⁹⁾』ではその高い評価を撤回し、ゴーゴリにおいては真理を愛するが故の公憤であったが、シチェドリンにあっては単に時流に乗って粹を利かせているに過ぎず、底の浅い諷刺に堕していると述べている。

その少し前をさぐってみると、『同時代人』1861年12月号に掲載された、スラヴ主義と西欧主義を融合しようとする試みの不毛なこと、教育のみによってナロードの状態を変え得ないこと、「大地」の概念の根拠薄弱などを指摘したアントノヴィチ（М.А. Антонович, 1835-1918）の論文《О „почве“》¹⁰⁾に対して、ストラホフ（Н.Н. Страхов, 1828-1896）が『ヴレーミャ』1862年1月号で反論し、¹¹⁾大地主義批判をめぐる論争などがあって、同年6月『同時代人』は8カ月の発行停止処分を受け、両誌間の確執は一旦収まったかに見えた時期もあった。しかし、1862年9月『ヴレーミャ』に掲載された新綱領が『同時代人』の基本方針に対立するもので容認し難いとして、ネクラソフとポмяловスキ（Н.Г. Помяловский, 1835-1863）はその後の寄稿を拒否し、同時にシチェドリンを駆ってドストエフスキ攻撃を開始する結果と

なった。

2 『死の家』と『同時代人』

ドブロリユーボフの死後（1861年）、チェルヌィシェフスキイが逮捕されて（1862年）シベリヤへ終身流刑に処せられ、ポーランドの革命的叛乱（1863年）やロシア各地の農民暴動が頻発するに及んで、政府の反動政策は日々強化され、『同時代人』の立場は次第に窮地に陥り始めるが、ドストエフスキイはドブロリユーボフやチェルヌィシェフスキイの世界観を公然と弁駁して反動陣営の一員とみなされることを依然として危惧していたためか、その後継者たちに鋒先を向けるという戦術転換の時期に入る。もはや『同時代人』はかつての「神聖なる進歩の理想」をかかげる「真理のための偉大な戦士」の信念はいまや全くないかのような印象を読者に与える手段にうったえ、『ヴレーミャ』と「実入りのある口笛屋ども」（хлебные свистуны）¹²⁾との論争の形をとるに至る。

半年ぶりに復刊した『同時代人』の1863年1—2月号に掲載された『文学的署名』¹³⁾の匿名の筆者をめぐる論議を両者の激論の始点とみなすことは妥当を欠いているようで、¹⁴⁾むしろ同号から掲載されたシチェドリンの連載社会事評《Наша общественная жизнь》のなかの『ヴレーミャの不安』¹⁵⁾こそその始点の本質に深くかかわっている。これは『ヴレーミャ』にのったドストエフスキイの論文¹⁶⁾の大地主義的思想を衝いたもので、己の敵対陣営に「御都合主義者」という蔑称の烙印を押そうとする試みを論難したものである。

『ヴレーミャ』の同年2月号と3月号にはドストエフスキイの社会評論が数多く発表され、初めての西欧訪問（1862年夏）の成果である『冬に記す夏の印象』¹⁷⁾では、新興ブルジョアジーの卑小な生活態度への嘲罵とともに、ロシアの大地が防壁となって西欧を危難から救ったロシア民族の汎人類的使命の偉大さを称揚し、ドストエフスキイとしてはおそらく初めての、フランスの空想的社会主義批判の萌芽も認められる。

シチェドリンが『同時代人』4月号のために原稿の要点を下書きした《Для следующих номеров „Свистка“》（Щ. V, 303-304）は、『ヴレーミャ』の発行停止と関連して日の目を見ずに終わったが、13項目のうち直接関係のある1, 6, 13項について検討してみよう。

1) 「森の散歩、または羽根のない鳥たち」。雑誌『ヴレーミャ』のために書かれたが編集部から拒絶された学術研究。

この種の「研究」はベルグ（Ф.Н. Берг, 1840-1909）¹⁸⁾の『ヴレーミャ』にのった詩《Птицы》¹⁹⁾を『ヴレーミャの不安』でもじったのが最初であろう。確固たる原理もなく、中途半端で思想穏健な大地主義者の「鳥」のイデオロギーを諷刺的に表現したもので、『同時代人』側が大地主義者とわたり合ったときに用いた後出の「雨燕」²⁰⁾の形象をシチェドリンが創り出した第一歩である。『ヴレーミャの不安』で云う鳥たちとはドストエフスキイ兄弟、А. Григорьев, ストラホフ（ペンネーム Косица）を指し、次のようなパロディーがその一節にある。

Так и Достоевских пара и с Косицей
Цыркают: беда нам! ах, беда нам, птицам!

Мы ли, птицы-птицы, смирно не живали,

Смирно не живали, в роще толковали,

(以下略)

鳥のイメージによる揶揄は、後述の шилохвост, стриж のほか、кулик, утка, гусятник 等一連の表現が用いられているが、これは理論斗争から離れた、多分に悪意のこもったサルカズムの手法の一つであろう。

6) 「比較語原学試論、またはフランス起原の『死の家』」。ミハイル・ズミエフ＝ムラジェンツェフの教訓的娯楽的研究。

これも1)と同様、『ヴレーミャの不安』と関連している。この作品の神秘主義的傾向は「ブルガーリンの伝統」に負うものとして、ブルガーリン(Ф. В. Булгарин, 1789-1859)の言葉を引用し、人間の魂は不滅ではないとは言っていないし、窃盗は罰すべきではないとも言っていない、この作品がフランスの典拠によるもので、ツァーリの苦役『死の家』は、もとペトラシェフスキ会の一員でありいまや悔悟したドストエフスキが妥協した専制権力と同義語であるときめつけた。シチェドリンは『死の家の記録』をかわることなく高く評価しているが、『ヴレーミャの不安』ではフランス仕込みについて次のように触れている。

«А что, если мы докажем вам, что самое русское из всего русского, в вас помещавшегося, ваш «Мертвый дом», написан на манер французского?»

(Щ. VI, 580)

このことは『死の家』の作者は、凝り固まった大地主義者より遙かに空想的社会主義思想に近く、当時の読者もこの作品を専制ロシアの政治・社会組織への告発として受け取っていたが、『冬に記す夏の印象』では、個人の自由を奪うツァーリの牢獄を、フランスの空想的社会主義者が理想としていた共産体屋舎に比している点を、作者の信条の変化として指摘したものであろう。

13) 「愚人が記す狂人の印象」。終始悪魔にとりつかれた新しいモルモン教徒の諷刺時事小品。

これもドストエフスキの『冬に記す夏の印象』をあてこすったことは明瞭で、『ヴレーミャ』誌上のこの作品のすぐ前に掲載されたベルグの詩《Греза и песня》(左)をもじった詩(右)が続いている。

(ベルグ)

Не отнимут люди, не отнимут —
Грезы, песня будут вечно с нами.
И за что б ни стали люди биться,
Греза, песня будут вечно с нами,
В сердце нашем глубоко таиться.

(シチェドリン)

Не отнимут люди, не отнимут —
Тупоумье будет вечно с нами;
И за что б ни стали люди биться,
Тупоумьем вряд ли соблазнятся:
Тупоумье будет вечно с нами!

前述の『ヴレーミャの不安』に対して、ドストエフスキイは直接回答を与えることをせず、やがて論争の表面からは一旦影をひそめはしたものの、生涯続く根源的な対立は深く内攻し、ドストエフスキイの葬儀の当日発行された『作家の日記』の中でも生々しい敵意が息づいていることから、この第一撃がいかに強烈で且つ根の深いものであったかがうかがわれる。しかし彼はシチェドリンの毒舌に誘発されて自分の告発者に正面切って反駁することはせずに、論争の核心からずれた議論へと誘導し、道義的信用を失墜させようとしたためか、迂回作戦によって搦手から論敵を無力化する戦法に転じたとも考えられる。

ドストエフスキイは『ヴレーミャ』誌上において、弁明ではなく「或るお説教」の意味で「説明」を試みるが、シチェドリンが大地主義の思想に見たものは「新しい言葉」ではなくて、スラヴ主義者がかつて食い散らして投げ捨てた「西瓜の皮」に過ぎなかった。

«А что, если мы докажем, что все ваше русское есть не более как арбузные корки, выкинутые вам покойною «Русской беседой» за ненадобностью и обглоданием?»
(Щ. VI, 49)

しかし既に魅力を失っていたスラヴ主義ときっぱり袂を分けて、『ヴレーミャ』としての新味を出し、進歩的読者層を獲得するためには、革新的知識人の広範な層にとってゆるがぬ権威となっていた『同時代人』との対決が必至であったので、ドストエフスキイが誌上の「説明」によってそのライバルを中傷することも必然的であったし、福音書に出会ったシベリヤの『死の家』以後の転生がしからしめたとも云えよう。以下に彼の手記を二三引用してみる。

«Революционная партия тем дурна, что нагремит больше, чем результат стоит, нальет крови гораздо больше, чем стоит вся полученная выгода. (Впрочем, кровь у них дешева.)»

«Социализм основан на неуважении к человечеству (стадность). И механизм (а сентиментальность, которую вы берете — вздор)»

«Из католического христианства вырос только социализм; из нашего вырастет братство»²¹⁾

以上の手記に見るように、ドストエフスキイのこのような思想は1850年代前半に形成され、やがて『白痴』(1868年)、『悪霊』(1872年)、『作家の日記』(1879年)においてさらに明確になり、シチェドリンとの対立はますます決定的になって行くのであるが、その過程において、上掲引用文中の«братство»の概念もやがて明らかになって行く。

「自分の中にたくさんの矛盾を同時に仕舞って置けるのは、ひとりロシア人あるのみだ」。これは『賭博者』に登場する英国人の言葉であるが、作者自身の言葉ととってもさしつかえないように思われる。ボルシチェフスキイも指摘しているように、シチェドリンはドストエフスキイの内面的二重性をあまりにも深くえぐり、あまりにも深く「地下室」に侵入したため、ドストエフスキイにとっては相手の個人的声望失墜が唯一の自衛手段となり、『シチェドリン氏、またはニヒリストの分裂』(『エポーハ』1864年№5)と題する誹謗文発表後、論敵シチェドリンに対して Щедродаров, Молодое перо, молодой человек, военная косточка, литера-

турный генерал, гусар в русской литературе 等の侮蔑的異名を与えて、論争の核心を回避しながら、まともな回答を避け続けたのではあるまいか。

そもそもこのような矛盾に満ちた内的世界、混沌たる諸価値を独自の手法で描出する、「嬰兒の心」と「蜥蜴の眼」を持った巨大な鬼子ドストエフスキイの思想の混乱と矛盾を、精神分析医のように相反並存感情の豊庫と見ることも、人道主義の殉教者とみなして感傷的な渴仰の涙を流すことも、あるいは思想の害毒を撒き散らす逆宣伝の作家ときめつけることも、いずれも的をはずれた受け入れ方であろうが、同時にそのいずれも巨人の一面を言い当てていると言えよう。当時の雑誌出版界では、各雑誌ともその商標ともいえるスローガンを掲げて思想的立場を宣伝することによって、読者を獲得することに懸命であり、一応掲げた綱領は必ずしも論旨明確でないことも珍しくはなく、論敵の一斉攻撃を浴びるのも無理からぬこともあった。殊に『ヴレーミャ』はグリゴリエフの思想に依拠しており、幼稚な混乱を内包した未熟な主張であって、旗印にかかげた「народ」とか「почва」という言葉の意味内容自体漠然としたもので、論議の中心に据えられたロシア農民の認識そのものにしてからが齟齬があったのでは、論争のかみ合いを期待すべくもなかったのである。特に革命的民主主義陣営との間の頑強な反目のなかには、互いに牽引し合う意識下の親近感とその反目から来る苦痛を伴っていたとすれば、ドストエフスキイとシチェドリンの相剋はスラヴ主義と西欧主義との対立以上に複雑な要素を多分にはらんだ、理解し難い両者の心事がからんでいたのではなかろうか。この意味において、事実上事実としても、ボルシチェフスキイが展開する明快な推論をそのまま受け入れることには抵抗を感じる箇所がないでもない。しかしいずれにせよ、両者の齟齬は雑誌経営上の打算と簡単に割り切ることを許さぬ本源的なもので、次に示す急進と穏健の対立もその一例であろう。

ポーランド事件を扱ったストラホフの論文「Роковой вопрос」が原因となり、「День」誌との経緯もあって1863年5月『ヴレーミャ』が発行停止処分を受けたことは種々の物議をかもし、「有害な傾向」故の検閲によるこの処分を当然とする意見もあった。大地主義陣営の機関紙の編集方針をこのように評価したことは、『同時代人』に掲載されたシチェドリンの論文（1863年11月）と関連があったと思われる。すなわち、社会の発展における「скачки」と「опасные salto-mortale」に関する『ヴレーミャ』の綱領や、『声』（1863年1月）に対して、シチェドリンは次のような対話の形で比喩的批評を加えたのである。

Постепенников（漸進論者）閣下と若い10等文官 Колобродников（腕白者）がネフスキイ通りを歩きながら話している。閣下は云う。「Нет, прыгать я не согласен!». 改革は一つの郡が終って、その実効を確認してから次の郡に着手し、目立たぬように着実に、逐次進めて行かねばならん、というのである。そこで若い10等文官はたずねる。ロシアには郡の数が600あるとして、その各々における改革が完全に実効を挙げたことを確認するのに少なくとも1年を要するとしたら、ロシア全土の改革が終るのに600年待たなければなりません、と。しかし閣下の答は判で押したようにはかわらない。「А по-вашему, лучше прыгать? Ну нет, прыгать я не согласен!» (Щ. VI, 176)

3 『地下室』と『同時代人』

ドストエフスキイは『ヴレーミャ』発禁に伴う兄の窮迫と病妻を後に、情人ポリーナの後を

追ってパリーに旅立ち、賭博による乱脈な生活で窮乏の度を加えた上で妻の死を見とり、1864年『ヴレーミャ』を『エポーハ』と改称して再刊することになった。これに『地下室の手記』が掲載され始めるや、再び論議が巻き起った。この主人公はある箇所において作者自身の見解を表わしており、シチェドリンの見解に対する反論的意味をも含むものであった。

理知 (рассудок) は人間の理知的能力を満足させるにすぎないが、意欲 (хотенье) は理知その他卑近な生理作用をも一切含む人間の全生命の発現である (Д. V, 115) とし、理知に対する意欲の優越を根本信条とするこの作品は、チェルヌイシェフスキの『何をなすべきか?』への反駁とみなされている。人物描写の非凡さに比し、批評的、理論的言説においては凡庸とされているドストエフスキが、個性の尊厳を強調するあまりに、自ら描いた架空の「水晶宮」に向って怪刀をふりかざしたわけである。作品の主人公の独白に次のような個所がある。

「その時わたしはこの世のすべてを美しくて崇高なものに変えてしまおうし、見るも穢らわしい、疑う余地なきがらくた (дрянь) の中にも、美しくて崇高なものを見つけ出すだろう。(略) たとえば、一人の画家がゲーのような絵を描いたとすれば、わたしはさっそくそのゲーのような絵を描いた画家の健康を祝して乾杯するだろう。なぜなら、すべての美しくて崇高なものを愛するからである。また一人の作家が『各自思いのままに』 (《как кому угодно》) という本を書けば、わたしはさっそく、『誰のであらうとかまわず』 (《кого угодно》) その人の健康を祝して乾杯する。なぜなら、すべての美しくて崇高なものを愛するからだ。」 (Д. V, 109)

かつてドストエフスキ研究家の中には《как кому угодно》という表現をもチェルヌイシェフスキの長篇《Что делать?》(1863年) という題名のパロディーとみなしたむきもあったようであるが、この作品はるかそれ以前から構想が成立したもので、完成して発表されるまでの間に影響を与えたことは事実としても、それはチェルヌイシェフスキ一人にとどまらず、ザイツェフ (В. А. Зайцев, 1842-1882)、ピーセムスキ (А. Ф. Писемский, 1820-1881) その他 60年代の多くの進歩的思想家の影響が認められ、殊に《как кому угодно》という表現そのものはシチェドリンの作品 (1863年8月, Щ. VI, 407-445) の題名であることは定説となっている。²²⁾ ドストエフスキはシチェドリンの《Как кому угодно》に殊更こだわっていたらしく、手記のなかで次のように述べている。

«Как кому угодно.

Учитесь милые дети.

Нет, не дается нигилизм г-ну Щедрину, не дается. Он в таком же затруднении поступив в нигилисты, как и генерал Зубатов (シチェドリンを指す一引用者), в его собственной повести, когда он хочет следовать за веком, биржу придумывает и даже выразиться не умеет, сам г. Щедрин назвал такого сорта людей умирающими. Нет, уж пусть г. Щедрин пишет попрежнему повести, не заботясь о нравоучениях к ним. *Нравоучение ему всегда подскажут*»²³⁾

この手記はシチェドリンの《Как кому угодно》に対するドストエフスキの態度を知る

うえにも、また「ゲーのような絵を描いた画家」について語る「地下室」の男の長広舌のなかで題名をあげずに暗示されている、シチェドリンのもう一つの作品に対するドストエフスキイの見解を知るうえにも興味あるものである。つまりシチェドリンを作品中の Зубатов に擬して《Наша общественная жизнь》(1863年11月)に反論しているのである。すなわち前章の末尾に挙げた Постепенников 閣下のきまり文句《прыгать я не согласен》のほかに、ゲー(H. H. Ге, 1831-1894, ペレドヴィジニキ派の画家)の絵にからませて「地下室」の男をほのめかした点に注目したのである。この絵は1863年9月の展覧会に展示されて好評を博した『最後の晩餐』を指している。シチェドリンは、自分は絵画の目利きではないと前置きしたうえで、自分をも含む観衆が感銘を受けた理由として、この絵は福音書の説話から神秘のヴェールをとりのぞき、現代の世相とも共鳴する教訓的な意味をキャンバスに表現していると指摘し、特に《заклучает в себе смысл картины (зерно драмы), имеет свою преемственность, что оно не только не окончилось, но всегда стоит перед нами, как бы вчера совершившееся》(Щ. VI, 154)という箇所、《вчера совершившееся》がまだ完結せずに眼前にあることを強調しているが、ドストエフスキイにとってはこのような絵の解釈に我慢がならず、「地下室」の男に反駁させており、さらに問題はそこにとどまらず、シチェドリンの云う「何等の誇張もなしに」真にリアルな発想を示したゲーを、必ずしも大衆を教化啓蒙する人すべてが範としているわけではないという箇所とも関連している。しかもシチェドリンはこの「誇張」という非難の言葉を「或る批評家」、つまり大地主義的傾向の始祖グリゴリエフ(Ап. А. Григорьев, 1822-1864)や、有名なその同調者に向けたのである。

鴨属の、羽根ばかり豪華で小さな痩せた шилохвость²⁴⁾という鳥を、経験の浅いハンターはつい追いまわすが、いざ仕留めてみると羽根ばかりで肉が少なく、味そのものは山しぎに劣りはしないが誰も食べはしない(Щ. VI, 150)²⁵⁾と誇張を揶揄した。この論争の初期にシチェドリンは大地主義者を「閑静な所で泳いでいる水鳥」にたとえたが、ドストエフスキイはこのことを、『ヴレーミャ』の編集部が鴨にたとえられたと受け取った。シチェドリンはこの散漫な解釈につけ込んで、ドストエフスキイを「本当の鴨」の異種である шилохвость にたとえたのであろう。

ドストエフスキイの内にも神秘主義的傾向の「誇張」を見たシチェドリンは、ゴーゴリの『外套』の人道主義的モチーフが、ドストエフスキイの『虐げられた人々』においては謙仰と従順の賞揚に変化していると見て、真の人道主義とは何等共通するところのない「ブルガーリンの伝統」に近いものとしてとらえている。国家権力と癒着し、社会の一部から支持されている宗教の危険性を警戒し、「頭のとっぺんから足の爪先まで武装したモンスター」に瞞着されぬよう、「無形の偶像」を認識しつつある人々に呼びかけている。

現実の社会を評価するためには、観念論的「誇張」のヴェールを除去する態度が必要であるとみて、豪華な見せかけの羽根で経験の浅いハンターを誘惑する「痩せた小さい水鳥」という比喩的表現を用いて、ドストエフスキイの作品における人生の真実を歪曲する「誇張」を指摘し、ゲーの絵が福音書の主題をリアルに解釈している点を、謙仰と従順の説教に対置している。

その後10年を経た1873年の『市民』に掲載されたドストエフスキイの論文『展覧会に関して』²⁶⁾では再びゲーの『最後の晩餐』に触れて、この絵は過去と現在を混淆した甚だ有害な誤謬、贋物であって、到底リアリズムなどではないと指摘している。また、このような見方を排斥する唯物論的見解は、「若い作家と芸術家たち」に悪影響を及ぼす文学的政治的本質に内在

するとして、最も重大な誤謬の一つは「悪徳の暴露」にある、つまり憎悪や復讐心をかきたてることが目標達成上唯一にして可能な方途とみなすところに誤謬があると述べている。これは『同時代人』の伝統を継ぐ『祖国雑記』の編集者シチェドリンとネクラースフを念頭に置いた発言とみられる。因みにネクラースフ批判は、同じ『展覧会に関して』のなかで、「制服はいかにも美しい、刺繍をしてあって、ぴかぴか光りはする…」と、70年代の進歩的青年層の間で好評だった『ロシアの女たち』を「憎悪や復讐へと駆り立てる制服を着せられた、かつては望みを囁かれていた才能あふれる詩人」と評している。このように『最後の晩餐』のリアリズムを完全に否定し、現実に対する観念論の見解を唯物論的見解に対置していることは、「地下生活者」と「ゲーの絵を描いた画家」との論争を補完するものである。

しかし「地下生活者」はシチェドリンの作品『各自思いのままに』に敵意を抱いており、本章の始めの方に引用した手記の原文と併せて検討してみると、2行目の«Учитесь, милые дети»という句は、シチェドリンの«Наша общественная жизнь»(1863年11月)にある«Правда ли, дети, что вы плохо учитесь?»(Щ. VI, 170-176)と題する論文のなかの«хоть бы для того вы учились, чтобы дать сим людям умереть поскорее!»という箇所と、『各自思いのままに』の思想とを関連させたもので、「シチェドリン氏のニヒリズム」、即ち、農奴制的ブルジョア体制の「神聖な基盤」をシチェドリンが否定している点を説明している。さらに同手記の末尾の«повести»とは『各自思いのままに』のなかの«Семейное счастье»(Щ. VI, 410-435)を、「нравоучение」とはその前に掲載された«Слово к читателю»(Щ. VI, 407-410)および最後の論文«Размышления»(Щ. VI, 435-445)を指すものととれば理解はさらに深まるであろう。

以上のようなドストエフスキイの思想は、『地下室の手記』が出た1864年の、下に引用する手記によってさらに明瞭になる。

«Социалисты хотят переродить человека, освободить его, представить [?] его без бога и без семейства. Они заключают, что изменив насильно экономический быт его, цели достигнут. Но человек изменится не от *внешних* причин, а не иначе как от перемены *нравственной*... Можно ли достигнуть этого оружием. И как сметь сказать заранее, прежде опыта, что в этом спасение! И это рискуя всем человечеством! Западная дребедень!»²⁷⁾

これに対してシチェドリンは、前途にきらめく発光点は現実と切り離されていないとしても、未来に向けられた理想を達成するためには幾山河を越えねばならず、それは過去と現在の否定ではなく、過去からの遺言を現在推進することによって得られる、より良きものと人間的なものの成果であるとしている。シチェドリンのこのような人間愛と広い視野に裏付けされた思想から、人間の人間による搾取への憎悪に貫かれたリシズムがほとぼしり、苛酷で恥ずべき現実を如何ともし難い苦い罪の意識が流れ、抑圧された人々をして社会悪に打ち克たしめようとする語句の力が読者の胸をうつのであろう。

4 「がらくた」と「あまつばめ」

人間のあらゆる行動は、知能と社会環境の発達程度に応じた利益追求の意欲によって条件づ

けられるという見解は、人間の利己的動機が各自の条理にかなった利益において集団の需要を充足することによって解決される社会機構のみが完全であるという結論を導き出し、悪の根源は人間の本性に胚胎するという見解を否定し、社会は科学的基盤の上に成立すべきものであって、宗教的神秘的な観念や、観念論哲学の形而上学的見方、「水晶宮」を「蟻塚」とみなす見方とは根本的に対立するものである。従ってシチェドリンとドストエフスキイの論戦は、現実には膠着するか、あるいはそれから超脱するか、精神の在り方が基本的に相違し、全く別の次元の、所詮交わることのない平行線であって、地下室の男の云う「水晶の建物」²⁸⁾は不壊の水晶宮ではなくて虚構であり、空中楼阁、蟻塚でしかなかったのである。

シチェドリンは『地下室の手記』や『再び若き文筆家』への反論として『あまつばめ』(1864年5月)と題する劇化した会話の形で、復活したサターン『エポーハ』の編集部とその同人たちを揶揄しながら、「美しく崇高なもの」を「見るも穢らわしい、疑う余地なきがらくた(дрянь)」と同一視するドストエフスキイの愚弄的毒舌に反論している。

戯画化されたこの劇には一貫して《За что они нас обидели?》というライトモチーフが流れていて、『グレーミャ』を閉鎖した検閲の不当な弾圧に対して同誌の共同編集者はおずおずと抗議しているが、幕切れ近くなって突然カトコフが編集会議をしている地下室に現われ、「雨燕たち」は心にもなく「悪うございました」と叫ぶ。

美学者である第3の雨燕(グリゴリエフ)によれば、陰うつな小説家である第4の雨燕(ドストエフスキイ)の作品は雨燕属だけではなく、鳥類全般がその熱心な読者になっているので、『エポーハ』はこの第4の雨燕の力で窮境を脱し得ることを疑う者はいない。そこで第4の雨燕は言う。私が書いた作品は『靈魂の不滅に関する手記』という題で、雨燕属にとって極めて重要な問題であり、我々の雑誌は雨燕属の機関紙であり、雨燕属のために雨燕属によって発行されている雑誌であることを示すためにこのテーマを選んだ。この手記の作者は病的な、意地悪な雨燕であるが、最初のうちは自分が意地悪だとか、この世のすべては無常だとか、今年の夏はきのこの出来がいいかどうかは誰も言えないとか、人間はすべてがらくた(дрянь)で、自分ががらくたであることを納得するまでは立派な人間になれないとか、いろいろ御託を並べてから本論に入る。論拠はおもに Фома Аквинский の説によるが、そのことには触れてないので、読者は作者の説そのものだと思っている。場面は暗くもなく明るくもなく、なにか灰色がかった色合いで、活気のないしゃがれ声が聞え、薄闇のなかをこうもりが飛び交っている。この世界は幻想的でもないが生きた世界でもなく、みんな泣いているが、それはただ腰をいためているからに過ぎない(III. VI, 493)。

ストラホフはドストエフスキイの『シチェドリン氏、またはニヒリストの分裂』と題する反論を、シチェドリンの『雨燕』に対比して、この論文は『雨燕』と同様、文学の世界の幻想であり、カリカチュアであったと述べているが、なるほど『地下室の手記』では別に靈魂の不滅とか、宗教とか、魂という言葉さえ見当らず、シチェドリンがこの作品を『靈魂の不滅に関する手記』と名付けたことは果して妥当であったであろうか。

『地下室の手記』第10章に「単に自然の法則によって、実際に存在しているからというだけの理由で、いい加減な妥協や、無限の循環零の上に(на непрерывном периодическом нуле)胡坐をかいてはいられない」(Д. V, 120)とあるが、この「零」を死の概念に結びつけることによってそのアンチテーゼ、靈魂の不滅という概念を導き出すことができる。

『作家の日記』(1876年10月)の『宣言』²⁹⁾には、退屈の挙句自殺した男の言葉として、「おれは幸福であることはできない。なぜなら、それらが明日にもすべて無に帰してしまうこ

とを承知しているからである。おれも、この幸福ぜんたいも、愛も、人間も、——なにもかも空に帰し、もとの渾沌に化してしまう」、「明日にも零に帰する虞れがあるといった条件では、幸福になり得ない」、「ある全能にして永遠な、死せる自然律によって必要なものであるにせよ…」という箇所がある。また『言葉だけの確定』³⁰⁾には「人間生存の根本的な最高思想、——人間靈魂の不滅を信ずること欠くべからず、避くべからざる緊要事」、「人類に対する愛は、人間の靈魂の不滅に対する信仰と共存するのでなければ、とうてい考えられもせず」とあり、さらに『青年について寸言』³¹⁾では「わが青年たちは悩んでいる、人生の高い目的の欠如に苦しんでいる」、「われわれの家庭では人生の高い目的などはほとんど口にのぼされないし、不死の思想にいたっては、単に考えもされないばかりでなく、むしろ皮肉な態度で遇されることすら、あまりにも珍しくない事実である」と述べている。

以上のように、シチェドリンが1863年に早くも『地下室の手記』を『靈魂の不滅に関する手記』と名付けたことは妥当であったと云えようが、これをさらに確認する資料として、『地下室の手記』執筆当時のドストエフスキイの手記を挙げることができる。

『青年について寸言』ではさらに「一たいわが国には、家庭というものがてんでない、とさきごろわが才能ある作家の一人が、私に反駁しながら言ったことがある」と述べるくだりに至って、暗にシチェドリンを非難していることがうかがわれる。いまの青年は賢明な人々ないしは指導者から、冷笑的見解以外になに一つ積極的な指示を受けておらず、1876年12月6日ペテルブルグのカザン広場で起ったデモは「鞭打たれた畜群」にすぎず、これは「彼らが何か崇高で美しきもの」、「最も偉大なる目的のための何か驚くべき自己犠牲」の名において集められたが、「醜悪な理想」を吹き込まれているがため、悪意にみちた不道德な愚行にすぎなかった、と口を極めていいる。ここで『地下室の手記』の「美しく崇高なもの」に対する嘲弄の意味が一段と明確になっている。

水晶宮 (хрустальный дворец) に対置した、神秘主義的な反語的「水晶の建物 (хрустальное здание)」の概念も明瞭になってくる。安寧無事、ノーマルな積極性よりも、破壊と混乱を愛する意志と欲望を持った人間にとっては、オルゴールの釘みみたいな存在になりさがって、二二が四のへば論理が支配する、あまりにも分別くさい、蟻塚同然の「水晶宮」なんかは対数表の悪魔のえさにでもしてしまいたいと思う「地下生活者」の作者によれば、地上生活ではない、何かしら別なものを渴望するに至る。それは神秘的な永遠の死後の世界である。

«Но достигать такой великой цели, по моему рассуждению, совершенно бессмысленно, если при достижении цели все угаснет и исчезает, т.е. если не будет жизни у человека и по достижении цели.

Следственно есть будущая, райская жизнь».³²⁾

シチェドリンはすでに『グレーミヤの不安』で、大地主義理論の内容が空疎なことを、鳥群のさえずりにたとえているが、《Литературные мелочи》³³⁾でもつばめにたとえたほか、ストラホフの《Заметки летописца》³⁴⁾への反論でもあり、この間の事情については《Литературные кусты》³⁵⁾で触れている。

1864年に入りますますます激化した意見の不一致は、『ロシアの言葉』と『同時代人』との不和から、やがてシチェドリンと編集部との軋轢に発展し、このような状況がドストエフスキイの『シチェドリン氏、またはニヒリストの分裂』の好材料となった。しかしこの論文は、ドスト

エフスキイが革進陣営の内紛を根本的に評価する意図がなかったためか、不和の本質にふれていないことは明らかで、本来の意図は、シチェドリソフとピーサレフあるいはザイツェフ（В. А. Зайцев, 1842-1882）との論争に容喙することによって、これを自分とシチェドリソフとの論争に利用することにあつたと思われる。この意味においてザイツェフの論文《Глушцы, попавшие в «Современник»³⁶⁾》とか、ブラゴスヴェトロフ（Г. Е. Благосветлов, 1824-1880）の《Кающийся, но не раскаявшийся фельетонист «Современника»³⁷⁾》、およびピーサレフの《Цветы невинного юмора》³⁸⁾が丁度つけ入る好材料を提供した。

これに対するシチェドリソフ側からの反論は、《Стрижам》（послание обер-стрижу, господину Достоевскому）（1864, № 7, Ц. VI, 495）と題する、辛辣なサルカズムに満ちた短文のみで、ほかには残されていないようである。

1864年4月にはドストエフスキイの妻が、つづいて7月には兄ミハイルが死去して怖るべき厄年であつたが、その年の秋と冬には《Журнальный ад》³⁹⁾（Ц. VI, 497-505）、《Наяда и рыбак》⁴⁰⁾（Ц. V, 199-215）がシチェドリソフによって書かれたし、ドストエフスキイの『片をつけるために。「同時代人」に対する最後の弁明』⁴¹⁾への反論でもあり、且つ『エポーハ』との論争に終止符を打つつもりでも書かれた《Гг. „Семейству М. М. Достоевского“ издающему журнал „Эпоха“》⁴²⁾（Ц. VI, 524-528）も12月中頃に執筆されたが、種々の理由により発表されず、いずれもそのままの形では作者の生前に日の目を見ずに終っている。

ジャーナリズムにおける両者の誌上論争は内容的に深みと広がり次第に加えつつ、1864年で一旦中断し、その後15年間、表面的には沈黙期に入る。1865年には『エポーハ』が廃刊になり、次いで翌1866年には『同時代人』が閉鎖された。

《Вице-губернаторство》（副知事気質）に責を負わされ、四方から論難攻撃の集中砲火を浴びたシチェドリソフは、編集部内でも疎外され、検閲の強化と相俟って窮地に陥り、1864年11月には編集部から身を引いて一同人とどまり、なんら改革的希望のない役所勤務に再び入る。しかし反動的な内務省には復帰せず、地方の税務監督局長を転々と勤めながら、行く先々の県庁幹部といさかいを繰返す。1867年秋に『祖国雑記』がネクラソフの手に移った翌年、1868年6月永久に退官してペテルブルグに転居し、同年9月からネクラソフの編集に協力しながら精力的な文筆活動に没頭し始める。

一方ドストエフスキイは『エポーハ』廃刊後、精神的、財政的に悪戦苦闘をしながら、1866年『ロシア通報』に『罪と罰』を発表、1867年には外国へ出て4年以上の間『白痴』、『永遠の夫』等を執筆するが、やがて経済的にも精神的にも安定の時期に入り、1875年には、シチェドリソフも編集部の一員となっていた『祖国雑記』に『未成年』を掲載、1877年にはシチェドリソフからドストエフスキイに対して短篇小説の寄稿を依頼（『作家の日記』発行中のため不成立）するという、一見平静な期間が続くが、1879年に『カラマゾフの兄弟』、シチェドリソフの『丸一年』などが出て、文学作品を通しての論議が再燃する萌芽は、種々の形で既に胚胎しつつあつたのである。

（1975年4月30日稿）

— 註 —

- 1) 札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」第8巻第1号, 1975年3月.
- 2) шавка лающая и кусающаяся («Эпоха» 1864, май).
- 3) Недостойный. «Искра» 誌の「Утро у редактора」で名付けた.
- 4) М. Е. Салтыков-Щедрин, Собрание сочинений в 20 томах, 1965~(続刊中), М., Худ. лит. 以下 Щ. と略記し, 巻数, ページ数をそれぞれローマ数字とアラビア数字で示す.
- 5) Ф. М. Достоевский, Полное собрание сочинений в 30 томах, 1972~(続刊中), Л. Наука. 以下 Д. と略記する.
- 6) С. Борщевский, Щедрин и Достоевский, история их идейной борьбы, М., 1956, Худ. лит. 以下 Борщ. と略記する.
- 7) «Время», 1862, февраль, «Критическое обозрение», стр. 162, «Два лагеря теоретиков».
- 8) «Время», 1862, апрель, «Недавние комедии»; Щ. III, 606-608.
«Время», 1862, сентябрь, «Наш губернский день»; Щ. III, 588.
- 9) «Время», 1863, март, «Современное обозрение», «Опять „Молодое перо“».
- 10) «Современник», 1862, № 12; М. А. Антонович, Избранные статьи, М., 1938, стр. 372.
- 11) «Время», 1862, № 1, «Пример апатии (письмо в редакцию «Времени» по поводу статьи г. Антоновича «О „Почве“».
- 12) ドブロリュエボフが発行していた『同時代人』の付録「Свисток」の名称から, 論敵がチエルヌイシェフスキー派に名付けた呼び名で, 「御都合主義者」の意に転ずる.
- 13) Г. П. Данилевский のペンネーム А. Скавронский について; Щ. V. 334-337.
- 14) Борщ. стр. 32; Щ. V, 334-337, 636; Щ. VI, 694.
- 15) «Современник», март, 1863; Щ. VI, 44-50.
- 16) «Время», 1863, № 1, «Необходимое литературное объяснение по поводу разных хлебных и нехлебных вопросов».
- 17) «Зимние заметки о летних впечатлениях», Д. V, 46-98. 「夏の印象に関する冬のノート」「夏象冬記」などの訳もある.
- 18) 詩人, 作家, 翻訳家, 60年代始めは「同時代人」の同人, 後「ヴレーミャ」「ロシア通報」の同人.
- 19) «Время», 1863, № 1.
- 20) «Современник», 1864, № 5, «Литературные мелочи»; Щ. VI, 488-494.
- 21) Борщ. стр. 55, 56.
- 22) Д. V, 383-384.
- 23) Борщ. стр. 77.
- 24) шилохвость=шилохвостка (かも属の水鳥, [俗] おしゃべり女, 金棒引き).
- 25) «Современник», 1863, № 11, «Наша общ. жизнь», «Картина Ге».
- 26) 河出書房新社, 米川正夫訳「ドストエフスキ全集」第14巻87-88頁. 以下, 米川訳と略記する.
- 27) Борщ. стр. 90.
- 28) 9章までは хрустальный дворец, 10章からは хрустальное здание.
- 29) 米川訳, 第15巻99-100頁.
- 30) 同上166頁.
- 31) 同上171頁.
- 32) Борщ. стр. 106.
- 33) «Современник», 1864, № 5; Щ. VI, 473-494.
- 34) «Эпоха», 1864, № 3 (または№ 12).
- 35) Щ. VI, 506-517; 「Эпоха」№ 8にのった1865年分予約募集広告への反論でもあり, 「同時代人」と「Эпоха」間の論争の最終段階に属する. 「同時代人」1864年№ 10に掲載するつもりで,

同年 10 月末—11 月始に書かれた。

- 36) チェルヌイシェフスキイやドブロリューボフの路線から離れたとして, «будирующий сановник» と非難. 「同時代人」3 月号でシCHEDリン反論.
- 37) «Русское слово» 1864, № 4. 無署名.
- 38) «Русское слово» 1864, № 2; Д. И. Писарев, Сочинения, т. 2, стр. 331–365.
- 39) Вас. В. Гиппиусによれば, この論文は 1864 年 8 月に書かれて「同時代人」9 月号に掲載されるはずだったとあるが, ペテルブルグの検閲委員会に提出されたのは 11 月 4 日であり, 1864 年 10 月後半に書かれたもの; ЛН, АН СССР, М., 1959, т. 67, стр. 368.
- 40) 「同時代人」1864 年 № 11–12 に掲載するつもりで書かれたが検閲により削除された.
- 41) «Эпоха», 1864, № 9.
- 42) 1864 年 12 月中頃の作品と思われる. 「同時代人」11–12 月号のために書かれたが, 編集方針によって掲載を中止したとする(ギППИУСの説)よりも, ドストエフスキイへの風当りを考慮して, ネクラソフまたはアントノヴィチが差し止めたと見るべきか.

参 考 文 献

- М. Е. Салтыков-Щедрин, Собрание сочинений в 20 томах, М., Худ. лит., 1965—(続刊中).
Ф. М. Достоевский, Полное собрание сочинений в 30 томах, Л., Наука, 1972—(続刊中).
С. Борщевский, Щедрин и Достоевский, история их идейной борьбы, М., Худ. лит., 1956.
М. Е. Салтыков-Щедрин в воспоминаниях современников, М., Худ. лит., 1957.
АН СССР, Литературное наследство, т. 13–14, М., 1934; т. 67, М., 1959.
М. С. Ольминский, Щедринский словарь, М., Гослитиздат, 1937.
Достоевский — художник и мыслитель, сборник статей, АН СССР, М., Худ. лит., 1972.
Феликс Кузнецов, Публицисты 1860-х годов, М., Молодая гвардия, 1969.
Н. А. Некрасов в воспоминаниях современников, М., Худ. лит., 1971.
Д. И. Писарев, Сочинения, т. 2, М., Худ. лит., 1955.
河出書房新社, 米川正夫訳「ドストエフスキイ全集」, 第 14, 15, 19, 20 巻.